



TITLE:

再び甲骨文の「不」と「弗」について --使役との関わりから--

AUTHOR(S):

戸内, 俊介

CITATION:

戸内, 俊介. 再び甲骨文の「不」と「弗」について --使役との関わりから--. シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相 2019: 219-238

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245175>

RIGHT:

再び甲骨文の「不」と「弗」について —使役との関わりから—

戸内 俊介

1. はじめに

戸内 (2018) は、甲骨文に見える否定詞「不」と「弗」の否定作用の違いについて検証を行ったものである。2018 年 3 月に刊行されたが、その後、自身の見解に変化が生じたため、本稿では改めて修正案を提示したい。

甲骨文の「不」と「弗」の研究概況については、戸内 (2018: 65–75) ですでに示したとおりであり、ここではその概略を記すに留める。

上古中国語の「不」と「弗」の機能については、従来、否定の強調度合いの違いにその区別を求めることが多かったが、丁聲樹 (1935: 991–992) が「弗」は「不之」に相当し、目的語代名詞「之」が内包されていると述べ、Boodberg (1934/1979: 430–431) が「弗 *piuət < 不 *piuə + 之 *ti」という合音説 (戸内 (2018) では「併合説」と称す) を提起して以降、様々な議論を呼んだ。現在でも幾ばくかの論争はあるが、大西 (1988)、魏培泉 (2001) が証明するように、併合説が現在では首肯される傾向にある。

一方で、甲骨・金文・『尚書』といったより古い文献では併合説が成り立たないことが、呂叔湘 (1941/1999: 82–83) や周法高 (1953/1972: 44) らによって早くから指摘されている。実際、後に見るように、甲骨文の「弗」はしばしば目的語をともなった動詞句を否定しており、「弗」に目的語代名詞「之」が含まれているとは考えにくい。

甲骨文の否定詞「弗」と「不」については、これまで種々の見解が提出されてきたが、中でも高嶋謙一氏の学説は今なお影響力が強い。Takashima (1988: 115) はまず「不」と「弗」を音節頭子音によって *p-type 否定詞と分類しつつ (一方、「勿」、「母」を *m-type と分類)、意志によってコントロールできない、uncontrollable な動詞を否定するものと分析する。その上で、「不」は状態性を否定する stative/eventive negative、「弗」を非状態性 (動態性) を否定する non-stative/non-eventive negative と解釈する (Takashima 1988: 127)。

無論、高嶋氏の見解にも問題が無いわけではない。例えば、「不」は時に、「獲」など動態性の高い動作動詞とも共起する。これに対し高嶋氏は、「saliency は「動作」よりは「現象」—即ち「獲」ということがおこる「イベント」にある」 (高嶋 1992: 46) と述べつつ、さらに、「「状態」と「現象」の違いとしては、前者が時間的にある程度継続するのを前提とするが、後者は継続性よりはむしろ瞬間的なイベントとしてとらえたものである。換言すれば、現象をくりかえすと状態に

なる。その点両者はちかいものと言える」(高嶋 1992: 48)として「不」が状態にも現象にも用いられる動機を説明しようとするが、アスペクト的な事態タイプ(situation type)が相反する両者に(Lyons 1977: 483 は, event (現象)を動態的タイプ(dynamic situation)の下位分類とする),なぜ同じ言語形式が取られているか,についての解釈としては説得力を持ち得ない。

張玉金(2006)は膨大な用例の検討を通して「不」と「弗」の差異について,いくつかの項目を挙げている。その中で,「不」は状態や動作を表す自動詞を否定し,「弗」は動作を表す他動詞を否定するとの見解を提示するが(張玉金 2006: 146),「不」が他動詞を否定する事例は,例外と言えないほど多く,また「弗」の否定する動詞は時に「死」や「疾」など典型的な動作行為ではない例も散見され,その結論は必ずしも首肯できるものではない。

2. 上古中国語の非対格動詞(unaccusative verb)について

戸内(2018)のあらましは次のようなものであった:「不」は,動詞の結果状態(或いは状態パーフェクト)の否定詞であり,先行して発生する動作プロセスは相当程度背景化され,結果残存・継続の局面が前景化されている;「弗」は動詞によって対象にもたらされた変化や結果を否定する“致使”(使役)の否定詞であり,「不」とは異なり,動作プロセスは背景化されていない。

論拠は,非対格動詞(unaccusative verb)と否定詞の共起状況にある。

ここで甲骨文の非対格動詞に立ち入る前に,まず,上古中期～後期¹の中国語における非対格動詞について概略を述べたい²。上古の非対格動詞は,明示的なヴォイスマーカーなくして主語と目的語の意味役割(thematic role)が交代する動詞を指す:目的語をとらないとき,主語の意味役割が被動作主(patient)や被使役者(causee)或いは対象(theme)となる;目的語を取るとき,主語の意味役割が動作主(agent)または使役者(causer)となり,目的語の意味役割が被動作者/被使役者/対象となる。非対格動詞文は従来,“受事主語句(被動作主主語文)”,“意念被動句(概念上の受動文)”,“反賓為主”,“施受同辞”などと称されてきた。

¹ 本稿では松江(2010: iii)により,上古中国語の時代区分を以下のように定める。

上古前期中国語:殷,西周時代,紀元前13世紀～紀元前771年

上古中期中国語:東周(春秋戦国)時代,紀元前771年～紀元前221年

上古後期中国語:秦,前漢時代,紀元前221年～紀元8年

言語資料としては,上古前期中国語は殷墟甲骨文,西周金文,『尚書』,『毛詩』など。上古中期中国語は楚簡(戦国時代楚の竹簡),『論語』,『春秋左氏伝』,『孟子』,『呂氏春秋』など。上古後期中国語は,秦簡(秦代の竹簡),漢簡(漢代の竹簡),馬王堆帛書,『史記』などが挙げられる。

² 以下の一段は,2013年度第1回TB+OC研究連絡会議(2014年1月26日,於立教大学)で筆者が口頭発表した,「上古中国語動詞研究概況—能格動詞・対格動詞の対立から—」に基づく。

- (1) 欒魴傷。 (『左伝』襄公 23 年)

欒魴は傷を負った。

- (2) 酆舒爲政而殺之，又傷潞子之目。 (『左伝』宣公 15 年)

酆舒は政権を取ると潞子嬰兒の夫人を殺し，さらに潞子の目を傷つけた。

例 (1)(2) ともに，動詞「傷」はいかなるマーカーも帯びていないが，前者では主語が被動作者（或いは被使役者）である一方，後者では主語が動作主（或いは使役者）で目的語が被動作者／被使役者となっている。

嘗ては，(2) のような他動詞型を基本形と見なした上で，(1) のような被動作者／被使役者／対象が主語に立つ自動詞型を受動文の一種と考え，文脈・修辭的要請，ないしは主語の有生性の低さに，その成立動機を求めていた。しかし，Cikoski (1978: 128–134) は上古中国語の動詞を能格動詞 (ergative verb) と中性動詞 (neutral verb) に分類し，自動詞型成立の動機を能格動詞の性質，謂わば，動詞固有の構造特徴に帰した。

上古中国語の議論では，能格動詞は非対格動詞に，中性動詞は非能格動詞 (unergative verb) に該当する³。非対格動詞は多くの場合，自動詞の下位に分類されるが，上古中国語では自動詞，他動詞に拘わらず，無目的語文の主語と有目的語文の目的語が同じ意味役割を持つ動詞についての謂いである。

後，Cikoski の学説は大西 (2004)，巫雪如 (2008)，宋亚云 (2014)，杨作玲 (2014) などに継承・修正され，近年盛んに議論されている。しかし，どの動詞を非対格動詞と認定するかには，研究者間で出入りが大きく，未だ一致を見ていない。筆者は主に，大西 (2004) 及び大西 (2009) に従う⁴。

具体例を見てみたい。非対格動詞は上で述べた通りであるが，一方，非能格動詞は目的語を取るか否かに関わらず，主語の意味役割が変わらない動詞である。両種の文型は以下のように図式化できる。

- | | | |
|-----|-----------------|----------------|
| (3) | 他動詞型 | 自動詞型 |
| | 非対格動詞：X + V + Y | ／ <u>Y</u> + V |
| | 非能格動詞：X + V + Y | ／ <u>X</u> + V |

例 (1)(2) の「傷」は非対格動詞とされ，目的語を取らないとき，その主語は「傷つけられる側」で，「傷つける側」ではない。一方，目的語を取るとき，主語は「傷つける側」で，目的語は「傷つけられる側」である。例えば，

³ 中国語研究において，能格動詞や非対格動詞がどのように扱われてきたのかについては，Aldridge (2015) が紹介しており，参照に値する。

⁴ 大西氏自身も，非対格動詞の認定基準を変えており，例えば大西 (2004) では，「敗」，「傷」を非対格動詞に含めていないが，大西 (2009) ではこれらを非対格動詞の例として挙げている。

- (4) 欒魴傷。(= (1)) (『左伝』襄公 23 年)
Y + 傷 = Y が傷つけられる

欒魴は傷を負った。

- (5) 酆舒爲政而殺之，又傷潞子之目。(= (2)) (『左伝』宣公 15 年)
X + 傷 + Y = X が Y を傷つける

酆舒が政権を取ると潞子嬰兒の夫人を殺し，さらに潞子の目を傷つけた。

次の「追」は反対に非能格動詞であり，目的語の有無に拘わらず，主語は常に「追う方」を指す。例えば，

- (6) 項王之救彭城，追漢王，至滎陽。(『史記』項羽本紀)
X + 追 + Y = X が Y を追う

項王（項羽）が彭城を救ったとき，漢王（劉邦）を追って，滎陽に着いた。

- (7) 燕軍樂毅獨追，至于臨菑。(『史記』樂毅列伝)
X + 追 = X が追う

燕軍の樂毅は単独で追ひ，臨菑に着いた。

非対格動詞に関連して，上古中国語動詞の「清濁別義」と称される現象についても触れておかねばなるまい。これは，声母（音節初頭子音）の清濁（有声か無声か）の違いによって，動詞の意味が異なる現象を指す。そしてその対立は，非対格動詞の「X + V + Y」型と「Y + V」型に対応する。

例えば，動詞「敗」は非対格動詞であるが，唐・陸德明『經典釈文』は「敗」の字音について，以下のような注を付す。

- (8) 鄭皇戌使如晉師，曰：“…楚師必敗。” 僂子曰：“（晉）敗楚服鄭，於此在矣。”
(『春秋左氏伝』宣公十二年)

『經典釈文』：敗楚，必邁反。

鄭皇戌は人を晉の軍隊のもとに行かせて言った，「…楚軍は必ず敗れます」と。僂子は言った，「（晉が）楚を破り，鄭を服従させるなら，正に今です」と。

『經典釈文』：「敗楚」は必邁の反。

（晉）敗楚：X + 敗 + Y（X が Y を敗北させる）

必邁の反 = 清音声母 = *prâts⁵

楚師必敗：Y + 敗（Y が敗北する）

（音注無） = 濁音声母 = *brâts

⁵ この上古音の復元音価は Schuessler (2009) による。

- (9) 惠公之季年，敗宋師于黃。 (『春秋左氏伝』 隠公元年)

『經典釈文』：敗，必邁反

惠公の季年は宋を黄で敗北させた。

『經典釈文』：「敗」は必邁の反

惠公之季年敗宋師：X + 敗 + Y (X が Y を敗北させる)

必邁の反 = 清音声母 = *prats

「敗」の声母と意味の対立は以下のように整理できる。

- (10) 敗 *brats (濁音)：敗北する (自動詞)
敗 *prats (清音)：敗北させる (他動詞／使役動詞)

多くの研究者は、この自他の対立を上古の形態的な違いに由来するものとして、上古音を復元するが、その解釈はなお一致を見ていない。例えば、Mei (2012: 11–12) は濁音声母の自動詞を語根 (root) と見なしつつ、清音声母の他動詞／使役動詞に対し、非濁音化を引き起こす causative *s-prefix を想定する。すなわち、

- (11) 敗 *brads > bwai ‘ruined, defeated’
敗 *s-brads > *prads > pwai ‘to ruin, to defeat’

一方、Baxter & Sagart (2014: 54) は清音・他動詞／使役動詞を語根と見なしつつ、濁音声母の自動詞に、濁音化を引き起こす intransitive *N-prefix (N = 後続の子音の調音点を伴った鼻音) を推定する。すなわち、

- (12) 敗 *N-pʰra[t]-s > baejH ‘suffer defeat’
敗 *pʰra[t]-s > paejH ‘defeat (v.t.)’

斯くして、清濁別義を上古の形態的違いの反映と見なすのが、現在の上古音研究の趨勢であるが、それでもなお筆者は清濁別義の存在そのものに対し懐疑的である⁶。そもそも清濁別義の代表例として扱われる「敗」、「見」、「別」、「折」は、いずれも非対格的振る舞いを見せる動詞であり、その文型の違い—「Y + V」か「X + V + Y」か—から意味的の違いを判別できるもので、そこにさらに音型の違いを想定するのは redundant である。また、清濁別義を伴うのが非対格動詞の一部に限られる点も、上古にその形態的な反映が体系的ではなかったことを裏付ける。

清濁別義については反論も多く、例えば古くは北齊・顔之推『顔氏家訓』音辞

⁶ この問題については、かつて野原将揮氏 (成蹊大学) と共同で「清濁別義」と称される現象について」という題目のもと、2014 年度第 1 回 TB + OC 研究集会 (2014 年 7 月 6 日、京都大学) にて研究報告を行った。

篇が、これを「此其穿鑿耳(こじつけであろう)」と批判しているほか、魏培泉(2000: 848)は、

- (13) 上古漢語有些單音節的使動詞雖可以用清濁或四聲來與其基式相區別，但在實際上却仍須依賴句法。如「甲敗乙」是「乙」失敗，而「甲敗」一定是甲失敗，不會理解為「甲 i 敗 j」(即甲打敗某一個對象，只是這個對象不具語音形式)。這也就是說，作為使動詞用法的一個動詞後頭一般得有一個具語音形式的賓語才行，也就是不能有零賓語。因此我們可以說，無論使動詞與其基式是否有形態的區別，其主要的區別還是依賴句法。此外上古漢語單音節使動詞和其基式間沒有形態的變化可能也有不少。

上古中国語のいくつかの単音節使動詞(非対格動詞の「X + V + Y」型：引用者注)は清濁や四声でその基本形式(非対格動詞の「Y + V」型：引用者注)と区別できるが、実際にはなお文法に依存せねばならない。例えば「甲敗乙」は「乙」が敗れるが、「甲敗」は必ず甲が敗れるのであり、「甲 i 敗 j」(即ち甲がある対象を打ち破るも、この対象が語音形式を備えていない)とは理解できない。これはすなわち、使動詞用法としてのある動詞の後ろにはふつう語音形式を備えた目的語がなければならず、つまりゼロ目的語ではいけないのである。従って私は、使動詞(X + V + Y)とその基本形式(Y + V)が形態的区別があるかどうかにかかわらず、その主要区別はやはり文法に依存するのだと考える。この他、上古中国語の単音節使動詞とその基本形式の間には形態変化がなかった可能性も少なくない。

として、清濁別義が認められない可能性を提示する⁷。以上により、本稿ではひとまず、非対格動詞と清濁別義を切り離して扱うこととする。

3. 戸内(2018)の論旨

以上は、上古中後期の状況であるが、甲骨文に目を向けると、やはり非対格的振る舞いの動詞を見ることができる。例えば例(14)～(21)の動詞「得」,「𠬞／𠬞(擒)」,「𠬞」,「𠬞(振)」,「𠬞／𠬞(賓)」,「來」,「涉」,「羸」である。うち、aは目的語をとった「X + V + Y」型、bは「X + V + Y」型の否定文、cは目的語がなく、被動作主或いは被使役者が主語となった「Y + V」型の否定文である。ここで我々は文型と否定詞の間に一定の傾向を見て取ることができる：「X + V + Y」型には「弗」が用いられ、一方「Y + V」型には「不」が用いられる⁸(なお「涉」,「羸」にはb「X + 弗 + V + Y」型が見えない)。

⁷ 以上の清濁別義に対する反駁は大西克也氏(東京大学)よりご教示いただいた。

⁸ 「不」が受動文に用いられる傾向があるというのは、朱岐祥(1992: 114)やDjamouri(2001: 166)で夙に指摘されている。

- (14) a. 雀得亘我。 (合集 6965) 【自賓問】⁹
 雀（人名）は亘（敵勢力）と我（敵勢力）¹⁰を捕獲する¹¹。
- b. 辛巳卜，敵貞：“雀弗其得亘我。” (合集 6959) 【賓一】
 辛巳の日に卜い，敵が検証した，「雀は亘（敵勢力）と我（敵勢力）を捕獲できない（＝亘と我が捕獲される結果に至らない）だろう」と。
- c. 貞：“失¹²羌不其得。” (合集 508) 【典賓】
 検証した，「逃げた羌は捕獲されないだろう」と。
- (15) a. 癸酉卜，出貞：“皐皐（擒）¹³舌方。” (合集 24145) 【出一】
 癸酉の日に卜い出地で検証した，「皐（人名）は舌方（敵勢力）を捕まえる」と。
- b. 貞：“弗其皐（擒）毳（麋）。” (合集 10344 正) 【賓一】
 検証した，「（我々は）麋（鹿の一種）を捕らえられない（＝麋が捕らえられる結果に至らない）だろう」と。
- c. 乙酉卜：“豕不其皐（擒）。” (合集 10249) 【自賓問】
 乙酉の日に卜った，「豕¹⁴の豚は捕獲されないだろう」と。
- (16) a. 辛亥貞：“雀牵亘，受又（祐）。” (合集 20384) 【歴一】
 辛亥の日に検証した，「雀は亘を捕らえるとき，祐を受ける」と。
- b. 貞：“兔¹⁵，三十馬弗其牵羌。” (合集 500 正) 【典賓】
 検証した，「兔（人名）と 30 人の馬を管理する役人は羌を捕らえることができない（＝羌が捕らえられる結果に至らない）だろう」と。

⁹ 各例文後の【 】は当該甲骨文の分類を示す。本稿の甲骨文の分類は黄天树（2007）及び楊郁彦（2005）に従う。


¹⁰ 本例の「我」が代名詞ではなく方国名であり，且つ殷に敵する勢力であるというのは，Takashima & Serruys（2010 vol. II: 127–128）による。

¹¹ 「説文」卷三下・卜部に「貞，卜問也」とあることから，曾ては卜辞の命辞は疑問文と理解されるのが支配的であったが，現在，否定的な見解が展開されており，議論となっている。とりわけ欧米では早い段階から，疑問文説に疑義が呈され（Serruys 1974: 22–23, Keightley 1978: 29），その後，Nivison（1989）など，広く受け入れられている。また，中国大陆でも，裘錫圭（1988/2012）が甲骨文の中に非疑問文があることを論じて以降，沈培（2005）などが追認している。このほか，高嶋（1989）は関連する議論を包括的に扱った論考である。本研究は基本的に，命辞＝非疑問文との立場を取るため，命辞を疑問文として訳さない。同時に，命辞に前接する「貞」字についても，疑問文を提示するマークとは見なさず，Takashima & Serruys（2010 vol. I: 23）の“(diviner) Y tested [to gain sapience from the numen of the turtle or bone]（貞人が〔甲骨の神霊から知恵を得るために〕検証した）」との解釈に従う。なお，反対意見としては，陳煒湛（1994/2003）がある。

¹² 「失（𠂔）」の字釈は趙平安（2000/2009）による。また，「失羌」は沈培（2002: 251）により「逃亡した羌」と解釈する。

¹³ 陳夢家（1956/1988: 554）及び葛亮（2013: 36）により「皐」を「皐」の異体字と解釈する。

¹⁴ 鳥（1967: 418）によると，「豕」は殷に属する一地方である。

¹⁵  は従来「兔」と隸定されてきたが，本稿では單育辰（2015: 73–79）によって「兔」と釈す。なお，ここでは人名と考えられる。

- c. 癸巳卜，賓貞：“臣不其牽。” (合集 643 正) 【典賓】
 癸巳の日に卜い，賓が検証した，「臣は捕らえられないだろう」¹⁶と。
- (17) a. 其壺（振）壹。 (屯南 236) 【無名】
 壺地を乱すであろう。
- b. 方來入邑，今夕弗壺（振）王自（師）。 (合集 36443) 【黃類】
 方（敵勢力）が邑に侵入するも，今夜，王の軍を乱すことができない（＝軍が乱される結果に至らない）だろう。
- c. 貞：“今夕自（師）不 壺（振）。” (合集 36430) 【黃類】
 検証した，「今夜，軍は乱されない」と。
- (18) a. 王窆（賓）父丁，歲（劇）二牛。 (合集 23188) 【出二】
王は祖先神の父丁を賓客となして厚遇するための祭祀をするとき，二頭の牛を斬り殺す。
- b. 弗其妨（賓）婦好。 (合集 2638) 【典賓】
 （上位にある某神）は祖先神の婦好を賓客となして厚遇しない（＝婦好が厚遇される結果に至らない）だろう。
- c. 貞：“下乙不旁（賓）于帝。” (合集 1402 正) 【典賓】
 検証した，「祖先神の下乙（祖乙）は最高神帝に賓客として厚遇されない」と。
- (19) a. 貞：“斐來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】
 検証した，「斐（人名）は牛をもたらす」と。
- b. 貞：“斐弗其來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】
 検証した，「斐は牛をもたらすことはできない（＝牛が到着する結果に至らない）だろう」と。
- c. 己未卜敵貞：“缶不其來見王。” (合集 1027 正) 【賓一】
 己未の日に卜い，敵が検証した，「缶（人名）は来て王にまみえることはないだろう／できないだろう」と。

¹⁶「臣」の身分については議論があり，奴隸であると言う者もいれば，官員であると言う者もいる。但しいずれにしても，第一期甲骨文で「臣」は「羌」と同様，捕獲される対象となっていることから，その身分は低いものと見なされる。例えば，

壬午卜，敵貞：“兕追多臣，失羌，弗牽。”

(合集 628 正) 【典賓】

壬午の日に敵が検証した，「兕（人名）が多臣と逃亡した羌を追うと，捕まえることができない」と。

従って，例 (16c) の「臣不其牽」の「臣」は動作主ではないと言える。ただし，同じ「臣」でも「小臣」は奴隸ではなく，高い身分である可能性もある（寒峰 1983: 43-50）。或いはもとは奴隸であったが，統治機構の複雑化につれてより多くの職能を得て身分が高くなったとも言われる（蕭良瓊 1991: 362-365）。

- (20) a. 戊辰卜貞：“翌己巳涉自（師）¹⁷。”（合集 5812）【賓三】

戊辰の日に卜い、検証した、「（我々は）次の己巳の日、軍隊に川を渡らせる」と。

- b. （無）

- c. 壬辰卜，夬：“噉今勿入，不涉。”（合集 20464）【自肥筆】

壬辰の日に卜い、夬（が検証した）、「噉（人名）¹⁸は今入ってはいけない、（入ると）川を渡れない」と。

- (21) a. 乙未卜，敵貞：“妣庚羸王疾。”（合集 13707 正）【賓一】

乙未の日に卜い、敵が検証した、「祖先神の妣庚は王の疾病を取り除く」と。

- b. （無）

- c. 疾齒羸¹⁹
不其羸。（合集 709 正）【賓一】

病んだ齒は良くなる。（齒は）良くならないだろう。

まず、否定詞「不」について、戸内（2018: 82–85）では、上古中期後期の非対格動詞の「Y + V」型の意味機能について巫雪如（2008: 185）や宋亞云（2014: 138）が単に結果状態を表すものと指摘していること、及び甲骨文中で「不」が「不吉」、「不佳」²⁰、「不効（嘉／男）」²¹のように単純な状態を否定していることに鑑み、「不」が「結果状態」に強く関与する否定詞であると推定したうえで、寺村（1984）や工藤（1995）を引きつつ、「結果状態」＝「結果継続」＝「状態パーフェクト」²²の否定詞であると結論付けた。

次に「弗」についてであるが、それが非対格動詞の「X + V + Y」型でよく用いられることによって、戸内（2018: 86–90）ではまず、非対格動詞の上古中後期における性格について検証した。大西（2009）を引きつつ、非対格動詞の「X + V + Y」型は語彙使役文であり、使役者が被使役者を直接コントロールするもので、使役イベントにおける結果事象（caused event）が使役者の行為によ

¹⁷ 裘錫圭（1979/2012: 25–26）は「涉師」の「涉」を“使動用法”，すなわち使役義を表しているとしつつ，“使師涉水（軍隊に川を渡らせる）”と解釈する。

¹⁸ 「噉」を人名とするのは、黄天樹（2007: 18）による。

¹⁹ 「ち」字は従来、「龍」字に隸定され、「龍」に讀まれてきたが、ここでは王蘊智（2004）により「羸」に隸定する。その具体的な釈読については、未だ明らかになっていないが、およそ「病が癒える」、「病を取り除く」の意味に相当する（王蘊智 2004: 75）。

²⁰ 甲骨文において「佳」は copula であると考えられる（Takashima 1990）。

²¹ 「効」字については、「嘉」に読むのが一般的である。しかし、黄天樹（2016: 3）は合集 19965 と合集 21071 を綴合することで得られる「効，唯其疾」で「効」を形容詞「嘉」と見なしては文意が通らないことから、これを「男」に読む。

²² パーフェクトは本稿では以下の定義に従う。

An anterior (perfects) signals that the situation occurs prior to reference time and is relevant to the situation at reference time. (Bybee et al. 1991: 54)

パーフェクトはある状況が参照時以前に起こり、且つそれが参照時の状況と関連を持っていることを示す。

て直接引き起こされる直接使役であることを確認し、さらに当該文型を取る用例（例 (14a)～(21a) 及び (14b)～(21b)）の主語がいずれも「雀」（殷人）、「皐」（殷人）、「兔／三十馬」（殷人）、「師」、「下乙」（祖先神）、「妣庚」（祖先神）といった（広義の）有生名詞であることから、甲骨文の語彙使役文は目的語に対する主語からの直接操作（direct manipulation）を表すものであったと解釈。そしてそこに「弗」が用いられるということから、「弗」が“致使”（使役）に関わる否定であると結論を下した。

また使役という状況に関して言えば、それは原因事象（causing event）と結果事象（caused event）が直接的な因果関係を構成して表現される²³。謂わば、「X + V + Y」は X が V という行為を遂行することで（原因事象）、その結果として Y に変化が生じる（結果事象）、というスキーマ的意味を有している。以上より戸内（2018）では、甲骨文の「弗」は V の表す動作によって対象にもたらされた変化や結果を否定する“致使”（使役）の否定詞であると、戸内（2018）は結論付けた。

4. 修正案①—「弗」について

「弗」は非対格動詞の「X + V + Y」型のほか、以下のように、有生の主語が目的語を対象に処置を加えることを表していると見られる文で用いられている。言い換えれば、これらは対象への直接操作を表す語彙使役文である²⁴。

- (22) 壬午卜，敵貞：“亘弗戔（翦）²⁵ 鼓。” （合集 6945）【典賓】

壬午の日に卜い、敵が検証した、「亘は鼓（敵勢力）を討ち滅ぼすことはできない（＝鼓が討ち滅ぼされる結果に至らない）」と。

- (23) 貞：“帝弗終茲邑。” （合集 14210 正）【賓一】

検証した、「帝はこの邑を終わらせることはできない（＝邑が終わる結果に至らない）」と。

- (24) 戌弗及方。 （合集 28013）【無名】

戌（守備）を担う役人は方（敵勢力）を捕らえることはできない（＝方（敵勢力）が捕らえられる結果に至らない）。

²³ 郭锐（2003: 155–156）による。

²⁴ 語彙使役文が動作プロセスを表すか、それとも結果だけを表し、動作プロセスを表さないか、については議論があり、上古中期以降では、動作プロセスが背景化していると一般的には考えられている。しかし、甲骨文の段階では常に（広義の）有生主語を取ることから、甲骨文の語彙使役文は有生の動作主による自主的な動作を表していると見て相違ない（戸内 2018: 87–88）。

²⁵ 「戔（翦）」字の字釈は陳劍（2007）による。

(25) 貞：“𠄎弗其𠄎𠄎龍。” (合集 6637 正) 【典賓】

検証した、「𠄎（人名）は𠄎龍（敵勢力）の侵攻を阻むことはできない（＝𠄎龍の侵攻が阻まれる結果に至らない）だろう」と。

例 (22) は相手国に攻撃を加え減ぼすか否かを表しているが、これは目的語に対する直接操作である。(23) も最高神である帝が殷の都市を終わらせるような処置を加えるか否か、という直接操作を表す。(24) の動詞「及」は Takashima & Serruys (2010 vol. II: 592) は“get”の意味に解するが、そうであるならば、やはり目的語「方」に対する直接操作と言える。(25) の動詞「𠄎」は、鄔可晶 (2016: 163) は「遮る, 阻む」を意味する「要／邀」と読んでいるが、そうであるならば、これもまた目的語「𠄎龍」に対する直接操作である。

(26) 己亥卜，王：“余弗其子婦姪子。” (合集 21065) 【白賓間】

己亥の日に卜い、王（が検証した）、「私は婦姪の生んだ子を王子とすることができないだろう」と。

例 (26) は、裘錫圭 (1979/2012b: 25–26) が名詞「子」の意動用法の例として挙げたものであるが²⁶、ここの「子」はあるいは使動詞で、「婦姪子」に対する「余」による何らかの処置を表していると思なすべきかもしれない。すなわち直接操作を表す語彙使役文である。

使役とは、上でも述べたように原因事象と結果事象の直接的な因果関係であり、例えば「X + V + Y」という構文は X の行為の結果、Y に変化が生じることを表す。加えて、使役事態について、Rappaport & Levin (1998) はその語彙概念構造を次のように示す。

(27) [[X ACT] CAUSE [BECOME [Y <STATE>]]]

(Rappaport & Levin 1998: 104)

これは、X が活動し (ACT)、Y がある状態 (STATE) に変化する (BECOME) ようにさせる (CAUSE)、という抽象的な意味構造を表す。ここで注目したいのは“BECOME”の局面である。使役事態の中には常に、結果の局面として内項 (Y) の「BECOME = 変化」が含意される。変化とは出来事の結果であり、終結点でもある²⁷。翻って考えるに、このような使役事態と強く関与する否定詞「弗」は、動詞句が表す事態の時間軸に沿った一連の展開が終結点に至らない、或いは変化が実現に至らないことを、取り立てて示しているのではないか。換言すれば、

²⁶ 裘錫圭 (1979/2012: 26) は“不以婦姪所生之子爲子（婦姪の生んだ子を子と見なさない）”と訳す。

²⁷ 楊榮祥 (2017: 12–13) は非対格動詞を結果自足動詞と称しつつ、その意味特徴として、ある結果を生じる「+終結」を挙げる。また、影山 1996: 60 は、(27) で挙げた語彙概念構造の中の瞬間相の変化を示す“BECOME”を telic、すなわち限界的と見なしている。

「弗」は限界性 (telic) の否定詞なのではなかろうかと推定される。これが本稿の修正案の1つである²⁸。「弗」が“致使”(使役)の否定となるのは、その限界性否定という機能の一部であると位置づけられる。

筆者が使役の否定を退け、限界性の否定へと考えを改めたのは、以下のように、使役と無関係な無意志動詞 (non-volitional verb) を否定する「弗」の存在によるところが多い。

- (28) 我弗其受黍年。 (合集 795 正) 【典賓】

我々は黍の豊作を受けられないだろう。

- (29) 子雍友敦，又（有）復，弗死。 (花東 21)

子雍が敦と友好関係を結び、そことの間を往復することがあるも、死ぬことはない²⁹。

- (30) 戊苐弗雉³⁰ 王衆。 (補編 8982 = 合集 26879) 【無名】

戊 (官職名) の苐 (人名) は王の衆を失わない。

- (31) 王弗疾目。 (合集 456 正) 【典賓】

王は目を病まない。

- (32) 甫弗其遭舌方。 (合集 6196) 【典賓】

甫 (人名) は舌方 (敵勢力) に遭遇しない。

以上の文はいずれも、Vendler (1967) の言うところの到達 (achievement) のアスペクトタイプを表していると解釈できる。そしてそれは (意図せぬ) 瞬時的な変化である。例えば、(28)「受黍年」、(29)「死」、(30)「雉王衆」は発生と終結が一瞬の出来事であるし、(31)「疾目」は無病状態から有病状態への変化を、(32)「遭舌方」は敵との不意の遭遇を表しており、いずれも瞬時的変化を示すものである³¹。これらの動詞句は、ここまで議論してきた動詞とは大きく異なり、使役と関係がないばかりか、目的語に変化をもたらすことも意味しない。むしろ主語に対する影響や変化の有無を表すものである。(28) は一人称主語「我」が「年」を受けたことによる (ポジティブな) 変化を、(29) は「子雍」が死ぬという変化を、(30) は「王衆」を失うという「戊苐」側の変化を、(31) は殷王の目の病変を、(32) は敵と遭遇することでもたらされる「甫」に生じるネガティブの変化や影響を表している。

²⁸ なお、戸内 (2018: 103) では「弗」が変化の局面に焦点を当てた否定詞である可能性に言及している。

²⁹ 本例の解釈は朱歧祥 (2006: 964) による。

³⁰ 「雉」字の解釈は沈培 (2002) による。

³¹ Chow (1982: 141) は「遭舌方」、「遭雨」は日本語の被害受け身文に相当し、望ましくない事態を表していると考ええる。

いずれにせよ「弗」は、動詞句の表す変化が実現に至らない＝事態の展開が終結点に到達しないことを示しているものという想定が可能であり、従って、限界性 (telic) の否定詞と見なすに相応しいものである。

5. 修正案②—「不」について

戸内 (2018) では、「不」を動詞の結果状態（或いは状態パーフェクト）の否定詞とする一方、「弗」を“致使”（使役）の否定詞と位置づけ、それぞれ異なった機能を担いつつ一対一で対立する否定詞であるという方向で立論した。しかし、本稿では、「弗」は事態の終結点の局面を焦点とした意味的に有標 (marked) の否定詞であり ([+telic])、一方「不」は、その点に関して無標 (unmarked) の一般の否定詞である ([±telic]) と、考えを改めたい。つまり、「不」は普遍的な否定詞として広範囲に用いられる一方で、何らかの変化が実現しないという点を話し手が取り立てたいときのみ、「弗」が用いられるということである。それゆえ、「不」の使用比率は「弗」を大きく超えるうえ、「弗」を用いることができる文脈で、しばしば「不」が用いられる。例えば、

- (33) a. 黄尹弗求 (咎) 王。 (丙編 104 = 合集 3458) 【典賓】

黄尹 (神霊) は王を災いのある状態に変えられない。

- b. 父乙不求 (咎)。 (龜甲 1.8.16 = 合集 2275) 【賓三】

祖先神の父乙 (小乙) は災いを下さないだろう。

- (34) a. 父乙弗蚩 (害) 王。 (合集 371 正) 【賓三】

父乙は王を害のある状態に変えられない。

- b. 羌甲不蚩 (害)³² 王。 (合集 1805) 【賓一】

祖先神の羌甲は王に害を下さないだろう。

Takashima (1988: 117–118) は例 (33b) の動詞「求 (咎) / 糸」³³ は「殷人にとって有害である、殷人に呪いをかけている」という状態的意味を表しており、それを否定する「不」は状態性の否定である；一方 (33a) は直接目的語「王」が現れることで、「求 (咎) / 糸」が状態動詞から非状態動詞へと変化しており、それを否定する「弗」は非状態否定である、との解釈を提示する。

対して本稿は、(33)(34) とも、a の「弗」[+telic] は「求 (咎)」や「蚩 (害)」が表す一連の事態が終結点に至らない、或いは目的語が表す対象に変化が実現し

³² 「蚩 (害)」の字釈については諸説あるが、ここでは裘錫圭 (1983/2012) による。

³³ 「求 (咎)」字は裘錫圭 (1986/2012: 284) の解釈であるが、Takashima (1988: 115–116) は「糸」で隸定する。

ないこと、謂わば「祖先神の行為によって殷王が悪い状態に変えられない」ことを述べ、一方bの「不」[±telic]は、変化が実現するかどうかに焦点がないものとする。

先にも述べたように、「不吉」、「不佳」、「不（嘉／男）」など単純な状態は「不」で否定されるが、これは、状態という[－telic]なアスペクトが、[＋telic]否定の「弗」と矛盾するからであろう。また非対格動詞の「Y＋V」型も「不」で否定されるが、これは宋亚云（2014: 138）や巫雪如（2008: 185）が述べるように、この文型の意味焦点が結果状態にあり、[－telic]な事態であるため、[＋telic]否定の「弗」とそぐわないことによると思われる。

このほか、「隻（獲）」も「弗」「不」双方の否定詞が見える。

- (35) a. 雀弗其隻（獲）缶。 (合集 6834 正) 【賓一】

雀は缶を捕らえることができない（＝缶が捕まる結果に至らない）だろう。

- b. 貞：“疋不其隻（獲）羌。” (丙編 120 = 合集 190) 【賓一】

検証した、「疋（人名）は羌を捕まえないだろう／捕まえることはできないだろう」と。

(35a)の「弗隻（獲）」[＋telic]は「缶」が「捕まる結果に至らない」という終結点の局面に焦点が当たっているが、(35b)「不隻（獲）」[±telic]は中立的な否定表現であり、事態の展開が終結点に至るかどうか、或いは変化が実現するかどうかに関心がないものと思われる。

下の「罝（擒）」は上文で述べた通り、非対格動詞と思われるが、複文の後節で用いられているときは、形の上で目的語がなくとも、意味的には目的語を伴った「X＋V＋Y」型（すなわち直接使役）として解釈できる。これは1つには前節でVO構造が提示されていることの影響であり、いま1つには、前節のVが非能格動詞（例えば「獸（狩）」や「射」、「田」）であることの影響である³⁴。この種の「罝（擒）」は「不」と「弗」、双方により否定される。

- (36) a. 弜罝（罝）³⁵ 𪔐鹿，弗罝（擒）。 (合集 28343) 【無名】

（我々は）𪔐地のノロジカを狩るのに罝を仕掛けまい。罝を仕掛けると、捕獲することはできない（＝ノロジカが捕獲される結果に至らない）。

- b. 壬申王勿[獸（狩）]³⁶，不其罝（擒）。 (合集 10407 正) 【賓一】

壬申の日、我が王は狩猟をすまい。狩猟をすると、獲物を捕獲できない。

³⁴ 大西（2004: 384–385）は、『史記』を中心的コーパスとしつつ、非対格動詞は非能格動詞やVO構造と連用されることで、目的語がなくとも主語が動作主となる事例を挙げている。

³⁵ 「罝」字は葛亮 2013: 52–53 により、「罝」と「𪔐（麋，ノロジカ）」の合文、或いは専用字と見なす。

³⁶ 「」は欠字を補ったことを表す。

例 (36a) のは複文前節で「罝を仕掛けること」について述べていることから、後節の「弗罝 (擒)」[+telic] は、「(罝を仕掛けたところで) ノロジカが捕獲される結果に至らない」ことを述べ、動詞の表す事態が終結点に至らないことを表しているものと思われる。一方で、(36b) の「不罝 (擒)」[±telic] は中立的な否定表現で、変化の実現に焦点がない。「弗」が終結点に強く関与していることの証左として、(36a) では「捕獲する」という行為の終結点となる獲物の名前「麋鹿」が見られるが、(36b) ではそれが見えない。

次は同版の中に「弗」と「不」が見える例であるが、同様の解釈が可能である。

(37) “其于甲迺射柳兕，亡災，罝 (擒)。”

“弗罝 (擒)。”

丙午卜，在冒貞：“王其田柳，卒逐亡災，罝 (擒)。”

“不罝 (擒)。”

(英國 2566) 【黃類】

もし甲の日になってから柳地の水牛³⁷を弓矢で狩れば、災いがなく、捕獲する

水牛を捕獲することができない (= 水牛が捕獲される結果に至らない)。

丙午の日に卜い、冒地で検証した、「王が柳地で狩猟をすれば、獲物を追い終るときまで、災いがなく、獲物を捕獲する

獲物を捕獲しない／捕獲できない。

第2辞「弗罝 (擒)」[+telic] では「射」という方法を使ったところで、「水牛が捕獲される結果に至らない」ということを表しているのであろう。一方、第4辞「不罝 (擒)」[±telic] は、終結点の局面を焦点としていない中立的な否定表現であり、「卒逐」、すなわち獲物を探索し追尾する間に、狩猟行為が行われないことを意味しているに過ぎない。「弗」は変化の実現に焦点があたるため、(36a) 同様、直前に終結点となる獲物の名前が見える。

付言すれば「弗卒」、「弗罝 (擒)」、「弗隻 (獲)」はしばしば、前節で捕獲対象を伴う。例えば、

(38) 𠄎追多臣失𠄎，弗卒。

(合集 628 正) 【典賓】

𠄎 (人名) が多臣と逃亡した𠄎を追うと、捕獲できない (= 多臣と𠄎が捕獲される結果に至らない)。

(39) 𠄎𠄎 (陷𠄎)，弗其罝 (擒)。

(合集 10951) 【自賓間】

𠄎が𠄎に落とし穴の罝をしかけると、捕獲することができない (= 𠄎が捕獲される結果に至らない)。

³⁷「兕」を「水牛」と解するのは、雷煥章 (2007) による。

- (40) 翌辛巳王勿往逐兕，弗其隻（獲）。 （合集 10401）【典賓】

次の辛巳の日に我が王は水牛を追うまい。追うと、捕獲できない（＝水牛が捕獲される結果に至らない）。

- (41) 其𪔐，弗其隻（獲）。 （合集 5516）【賓一】

もし虎を打てば、捕獲できない（＝虎が捕獲される結果に至らない）だろう。

例 (39)(41) は一見すると目的語が見えないが、動詞「𪔐」³⁸ は目的語「麋」を、動詞「𪔐」³⁹ は目的語「虎」を含んだ文字と見なされる⁴⁰。

このほか、上で挙げた、(28)～(32)は無意志動詞が「弗」で否定される例であるが、これらの無意志動詞は項構造の変換なしに「不」でも否定される。以下、a は「弗」の例 ((28)～(32)の再掲)、b は「不」の例である。

- (42) a. 我弗其受黍年。（＝(28)） （合集 795 正）【典賓】

我々は黍の豊作を受けられないだろう。

- b. 今歲我不其受年。 （合集 9668 正）【賓一】

今期、我々は作物の豊作を受けないだろう。

- (43) a. 子雍友敦，又（有）復，弗死。（＝(29)） （花東 21）

子雍が敦と友好関係を結び、そこの間を往復することがあるも、死ぬことはない⁴¹。

- b. 往鵠，疾，不死。 （花東 3）

（子が）鵠地へ行くと、病にかかるも、死なない⁴²。

- (44) a. 戌兕弗雉⁴³ 王衆。（＝(30)） （補編 8982 = 合集 26879）【無名】

戌（官職名）の兕（人名）は王の衆を失わない。

³⁸ 「𪔐」字の解釈については、裘錫圭（1980/2012: 82–83）の“用陷阱捕獸（落とし穴で獸を捕らえる）”による。なお、裘氏は当該字を「陷麋」の合文と見なす。

³⁹ 「𪔐」字の解釈は裘錫圭（1976/2012）による。

⁴⁰ 但し、葛亮（2013: 63–68）が A1 間接狩猟行為に分類した「獸（狩）」や「田」は通常、動詞後に狩猟対象をすることはなく、地名のみを取ることから、獲物に対する直接的な狩猟行為を表さないと考えられる。これらの動詞は、狩猟対象を目的語に取らなくとも、後節の動詞は「弗」を用いることがある。

王獸（狩）雀，弗𪔐（擒）。

（村中南 68 + 合集 33384）【無名】

王が雀地で狩猟をすると、（獲物を）捕獲できない（＝獲物が捕獲される結果に至らない）。

翌日戌王其田𪔐，弗擒。

（屯南 2739）【無名】

次の戌の日、王がもし凄地で狩猟すると、（獲物を）捕獲できない（＝獲物が捕獲される結果に至らない）。

⁴¹ 本例の解釈は朱歧祥（2006: 964）による。

⁴² 本例の解釈は朱歧祥（2006: 959）による。

⁴³ 「雉」字の解釈は沈培（2002）による。

- b. 多射不雉衆。 (合集 69) 【典賓】

多射（官職名）は衆を失わない。

- (45) a. 王弗疾目。(= (31)) (合集 456 正) 【典賓】

王は目を病まない。

- b. ☐不疾。 (合集 13814) 【典賓】

病まない。

- (46) a. 甫弗其遘舌方。(= (32)) (合集 6196) 【典賓】

甫（人名）は舌方（敵勢力）に遭遇しない。

- b. 于辛省田，無災，不遘雨。 (合集 28633) 【無名】

辛の日になって（王が）狩獵地を視察するとき、災いはなく、雨に降られない。

繰り返しになるが、上の文はいずれも（意図せぬ）瞬時的な変化を表す到達（achievement）のアスペクトタイプに該当する。これらが「弗」で否定されるときは、上で述べたように、動詞句の表す変化が実現に至らないこと、事態の展開が終結点に到達しないことを示していると考えられる。では、なぜ同じ動詞句が「弗」のみならず、「不」でも否定されるのであろうか。

この問題について、「変化」に備わる2つの性質から考えてみたい。「変化」とは無から有への移行であり、移行である以上それは動態的な事態である。さらに何らかの有形の結果として実現するものであることから、終結点を備えた[+telic]な事態とも見なすことができる。この意味において、変化を否定する際、「弗」を用いることについて何ら疑問を差し挟む余地はない。しかし一方で木村（1997/2007: 7）が述べるように、人間にとって変化の具体的存在は完了後の姿を通してしか観察できず、そして変化が完了した後の姿とは結果状態である。つまり、人が変化を認知する基板は変化後の「状態」にある。以上により、変化は以下のような二面性を伴ったものと言える：①「無から有への瞬時的変移」という点から見れば、[+telic]である；②人がそれを変化後の「結果状態」を通して認識するという点から見れば、それは[-telic]でもある。

変化のこのような二面性に基づくと、到達動詞を否定する「弗」と「不」について、以下のような推論を導き出せる：話し手がその変移の側面を取り立てたいとき、当該事態を[+telic]に位置づけ、[+telic]の否定詞“弗”を用いる；一方、話し手がその変移を特に取り立てようとしなないときは、“弗”を用いず、[±telic]の否定詞“不”を用いる。

6. おわりに

本稿では、戸内（2018）の結論を以下のように修正した。

戸内（2018）	修正案
「弗」はVが表す動詞によって対象に何らかの変化や結果をもたらすということを否定する“致使”（使役）の否定詞であり、「不」とは異なり、動作プロセスの局面は背景化されていない。	「弗」は文の表す事態の時間軸上の展開が、終結点に至らないこと、何らかの変化が実現に至らないことを示す、限界性（telic）の否定詞である。“致使”（使役）の否定詞となるのは、その機能の一部である。
「不」は、動詞の結果状態（或いは状態パーフェクト）の否定詞であり、先行して発生する動作プロセスの局面は相当程度背景化され、結果残存・継続の局面が前景化されている。	「弗」が[+telic]の有標（marked）の否定詞であるならば、「不」は[±telic]の無標（unmarked）の否定詞であり、事態が終結点に至るかどうかという点は中和されている。

参考文献

【日本語】

- 大西克也. 1988. 「上古中国語の否定詞“弗”と“不”の使い分けについて」『日本中国学会報』第40集：232-246.
 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版.
 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—』東京：ひつじ書房.
 島 邦男. 1967. 『殷墟卜辭綜類』東京：大安.
 高嶋謙一. 1989. 「殷代貞卜言語の本質」『東洋文化研究所紀要』第110冊：1-166.
 高嶋謙一. 1992. 「太古漢語（10）」『中国語』1992年10月号：45-48.
 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
 戸内俊介. 2018. 「甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異」『東洋文化98 特集 出土文獻と秦楚文化（1）』：65-112.
 森賀一恵. 2000. 「卜辭の法表現」『東方學報』（京都）第72冊：1-16.

【English】

- Aldridge, Edith. 2015. Ergativity and unaccusativity. (最終閲覧日：2018年5月10日) http://faculty.washington.edu/aldr/pdf/ECLL_erg.pdf, 2015
 Baxter, William H & Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. New York: Oxford University Press.
 Boodberg, Peter A. 1934/1979. Note on morphology and syntax I. The final -t of 弗. *Selected Works of Peter A. Boodberg*: 430-435, Berkeley: University of California Press, 1979.
 Bybee, Joan L, Perkins, Revere & Pagliuca, William. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

- Chow, Kwok-Ching (周國正). 1982. *Aspects of Subordinative Composite Sentence in the Period I Oracle-Bone inscriptions*. Ph.D. dissertation. Vancouver: University of British Columbia.
- Cikoski, John S. 1978. An outline sketch of sentence structure and word classes in Classical Chinese—Three essays on Classical Chinese grammar: I. *Computational Analysis of Asian & African Languages*. 8: 17–152.
- Djamouri, Redouna. 2001. Markers of predication in Shang bone inscriptions. *Sinitic Grammar: Synchronic and Diachronic Perspectives* (ed. by Chappell, Hilary): 143–171, New York: Oxford University Press.
- Keightley, David N. 1978. *Source of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics* 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mei Tsu-Lin (梅祖麟). 2012. The causative *s-prefix and voicing alternation in Old Chinese and related matters in Proto-Sino-Tibetan. *Language and Linguistics* 《語言暨語言學》 13.1: 1–28.
- Navison, David S. 1989. The “question” question. *Early China*. vol.14: 115–125.
- Rappaport, Malka & Levin, Beth. 1998. Building verb meanings. *The Projection of Argument: Lexical Compositional Factors* (edited by Miriam Butt & Wilhelm Geuder): 97–134, California: CSLI Publications.
- Serruys, Paul L-M. 1974. Studies in the language of the Shang oracle inscriptions. *T'oung Pao* 60: 12–120, Leiden: E.J. Brill.
- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Takashima, Ken-ichi (高嶋謙一). 1988. Morphology of the negatives in oracle-bone inscriptions, *Computational Analysis of Asian and African Languages*. 30: 113–133.
- Takashima, Ken-ichi. 1990. A study of copulas in Shang Chinese. *The Memories of the Institute of Oriental Culture*. 112: 1–135.
- Takashima, Ken-ichi & Serruys, Paul L-M. 2010. *Studies of Fascicle Three of Inscriptions from the Yin Ruin*, Volume I & II. 臺北：中央研究院歷史語言研究所。
- Vendler, Zero. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

[中文]

- 陳夢家. 1956/1988. 《殷墟卜辭綜述》北京：中華書局
- 陳劍. 2007. 〈甲骨金文“𠄎”字補釋〉陳劍《甲骨金文考釋論集》：99–106. 北京：線裝書局
- 陳平. 1998. 〈論現代漢語時間系統的三元結構〉《中國語文》1988年第6期：401–422.
- 陳煒湛. 1994/2003. 〈論殷虛卜辭命辭的性質〉陳煒湛《甲骨文論集》：154–168, 上海：上海古籍出版社, 2003年12月
- 大西克也. 2004. 〈施受同辭芻議—《史記》中的「中性動詞」和「作格動詞」〉高嶋謙一, 蔣紹愚 (編)《意義與形式—古代漢語語法論文集》：375–394. München: Lincom Europe
- 大西克也. 2009. 〈試論上古漢語詞彙使役句的語義特點〉朱岐祥, 周世箴 (編)《語言文字與教學的多元對話》：383–401. 臺中：東海大學中文系
- 丁聲樹. 1935. 〈釋否定詞「弗」「不」〉《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》：965–996. 北平：國立中央研究院歷史語言研究所
- 葛亮. 2013. 〈甲骨文田獵動詞研究〉《出土文獻與古文字研究》第5輯：31–153.
- 郭銳. 2003. 〈“把”字句的語義構造和論元結構〉《語言學論叢》第28輯：152–181. 北京：商務印書館
- 寒峰. 1983. 〈商代「臣」的身份攷析〉, 胡厚宣編《甲骨文與殷商史》：36–59, 上海：上海古籍出版社
- 黃天樹. 2007. 《殷墟王卜辭的分類與斷代》北京：科學出版社
- 黃天樹. 2016. 《甲骨拼合四集》北京：學苑出版社
- 雷煥章 (葛人 譯). 2007. 〈商代晚期黃河以北地區的犀牛和水牛—從甲骨文中的𠄎和𠄎字談起〉《南方文物》2007年第4期：150–160.
- 呂叔湘. 1941/1999. 〈論毋與勿〉呂叔湘《漢語語法論集 (增訂本)》：73–102. 北京：商務印書館, 1999年
- 木村英樹. 1997/2007. 〈“變化”和“動作”〉《日本現代漢語語法研究論文選》：1–15. 北京：北京語言大學出版社, 2007年
- 裘錫圭. 1976/2012. 〈說“玄衣朱襪”——兼釋甲骨文“𠄎”字〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第三卷：3–5. 上海：復旦大學出版社, 2012年
- 裘錫圭. 1979/2012. 〈殷墟甲骨文研究概況〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：20–26. 上海：復旦大學出版社, 2012年

- 裘錫圭. 1980/2012. 〈甲骨文字考釋（八篇）〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：72-91. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1983/2012. 〈釋“蚩”〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：206-211. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1986/2012. 〈釋“求”〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：274-284. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1988/2012. 〈關於殷墟卜辭的命辭是否問句的考察〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：309-337. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 單育辰. 2015. 〈甲骨文中的動物之三——“熊”，“兔”〉《出土文獻與古文字研究》第 6 輯：69-86.
- 沈培. 2002. 〈卜詞“雉众”補釋〉《語言學論叢》第 26 期：237-256. 北京：商務印書館
- 沈培. 2005. 〈殷墟卜辭正反對貞的語用學考察〉丁邦新，余霽芹（主編）《漢語史研究：紀念李方桂先生百年冥誕論文集》：191-233. 臺北：中央研究院語言學研究所
- 松江崇. 2010. 〈古漢語疑問賓語詞序變化機制研究〉東京：好文出版
- 宋亞云. 2014. 《漢語作格動詞的歷史演變研究》北京：北京大學出版社
- 王蘊智. 2004. 〈出土資料中所見的“羸”和“龍”〉《鄭州師範大學學報（哲學社會科學版）》第 37 卷第 6 期：72-78.
- 魏培泉. 2000. 〈說中古漢語的使成結構〉《中央研究院歷史語言研究所集刊》第 71 本第 1 分：807-856.
- 魏培泉. 2001. 〈「弗」，「勿」拼合說新證〉《中央研究院歷史語言研究所集刊》第 72 本第 1 分：121-215.
- 巫雪如. 2008. 〈從認知語義學的角度看上古漢語的「作格動詞」〉《清華中文學報》第 2 期：161-198.
- 鄺可晶. 2016. 〈甲骨文“弔”字補釋〉《中國文字》第 42 期：151-164.
- 蕭良瓊. 1991. 〈「臣」，「宰」申議〉王宇信（編）《甲骨文與殷商史》第 3 輯：353-375，上海：上海古籍出版社
- 楊榮祥. 2017. 〈上古漢語結構自足動詞的語義句法特征〉《語文研究》2017 年第 1 期：11-17.
- 楊郁彥. 2005. 《甲骨文合集分組分類總表》臺北：藝文印書館
- 楊作玲. 2014. 《上古漢語非賓格動詞研究》北京：商務印書館
- 張玉金. 2006. 〈論甲骨文中“不”和“弗”的根本區別〉東海大學中國文學系（編）《花園莊東地甲骨論叢》：127-153，臺北：聖環圖書出版
- 趙平安. 2000/2009. 〈戰國文字的“遊”與甲骨文“𠂔”為一字說〉趙平安《新出簡帛與古文字古文獻研究》：42-46，北京：商務印書館
- 周法高. 1953/1972. 《中國古代語法 稱代編》臺北：臺聯國風出版社，1972 年
- 朱岐祥. 1992. 〈殷墟卜辭句法論稿——對貞卜辭句型變異研究一〉臺北：學生出版社
- 朱岐祥. 2006. 《殷墟花園莊東地甲骨校釋》臺中：東海大學中文系語言文字研究室

引用版本及び略称

- 丙編：張秉權.《小屯第二本：殷虛文字丙編》臺北：中央研究院歷史語言研究所，1957-1972 年
- 合集：郭沫若（主編），中國社會科學院歷史研究所（編）。《甲骨文合集》北京：中華書局，1977-1982 年
- 屯南：中國社會科學院考古研究所（編）。《小屯南地甲骨》北京：中華書局，1980-1983 年
- 英國：李學勤，齊文心，艾蘭編。中國社會科學院歷史研究所，倫敦大學亞非學院（編輯）《英國所藏甲骨集》北京：中華書局，1985-1992 年
- 花東：中國社會科學院考古研究所（編）。《殷墟花園莊東地甲骨》昆明：雲南人民出版社，2003 年 12 月
- 村中南：中國社會科學院考古研究所（編）。《殷墟小屯村中村南甲骨》昆明：雲南人民出版社，2012 年 4 月
- 左伝：楊伯峻（編）。《春秋左傳注（修訂本）》北京：中華書局，1990 年 5 月
- 史記：標點本二十四史《史記》北京：中華書局，1997 年 11 月